

ムーンショット型研究開発事業
令和5年度プロジェクト事後評価について（目標8）

(1) 目的

プロジェクトの研究開発の実施状況、研究開発成果等を明らかにし、今後の成果の展開及び事業運営の改善に資することを目的とする。

(2) 実施時期

事後評価は、研究終了前の適切な時期に実施する。

(3) 評価項目及び基準

- ムーンショット目標達成等に向けたプロジェクトの目標や内容の妥当性
- プロジェクトの目標に向けた進捗状況(特に国内外とも比較)
- プロジェクトの目標に向けた今後の見通し
- 研究開発体制の構築状況
- PMのプロジェクトマネジメントの状況(機動性、柔軟性等を含む。)
- 研究データの保存、共有及び公開の状況
- 産業界との連携及び橋渡しの状況(民間資金の獲得状況(マッチング)及びスピリアウトを含む。)
- 国際連携による効果的かつ効率的な推進
- 大胆な発想に基づく挑戦的かつ革新的な取組
- 研究資金の効果的・効率的な活用
- 国民との科学・技術対話に関する取組
- その他(1)に定める目的を達成するために必要なこと。

なお、上記に関する詳細については、評価者が決定する。

(4) 評価者

評価者はPDとし、評価にあたってはアドバイザー等の協力を得て行う。

(5) 評価の手続き

プロジェクトごとに、被評価者からの報告及び被評価者との意見交換等により評価を行う。この場合において、必要に応じて研究開発実施場所での調査等又は外部有識者の意見の聴取を行うことができる。評価結果はガバニング委員会に報告する。

※評価対象プロジェクト、評価会実施日、評価者一覧は別紙のとおり

(別紙)

■評価対象プロジェクト

※コア研究プロジェクトへの移行に伴い終了する要素研究プロジェクト

➤ 小槻プロジェクト

■評価会実施日

令和5年11月22日

■評価者一覧（目標8）

氏名	所属・役職等
三好 建正（PD）	理化学研究所 計算科学研究センター チームリーダー
坂上 貴之	京都大学 大学院理学研究科 教授
中澤 哲夫	東京大学 大気海洋研究所 学術支援職員
井村 順一	東京工業大学 工学院 教授／理事・副学長
潮 俊光	南山大学 理工学部 教授
牛尾 知雄	大阪大学 大学院工学研究科 教授
大原 美保	東京大学 大学院情報学環 総合防災情報研究センター 教授
齊藤 和雄	気象業務支援センター 研究推進部 室長
標葉 隆馬	大阪大学 社会技術共創研究センター 准教授
水藤 寛	東北大学 材料科学高等研究所 教授
安田 珠幾	気象庁 総務部 参事官
山田 道夫	京都大学 数理解析研究所 特任教授
余田 成男	京都大学 国際高等教育院 副教育院長/特定教授

※所属・役職等は評価会時点のもの

※評価にあたっては、公正で透明な評価を行う観点から、別途定める手続きに従い、被評価者の利害関係者が加わらないようにした。

ムーンショット型研究開発事業
研究開発プロジェクト 事後評価結果

1. プログラム

目標 8 「2050 年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現」

プログラムディレクター 三好 建正

2. 研究開発プロジェクト名

気象制御のための制御容易性・被害低減効果の定量化

3. プロジェクトマネージャー（機関名・役職は評価時点）

小槻 峻司（千葉大学 国際高等研究基幹／環境リモートセンシング研究センター 教授）

4. 研究開発プロジェクト実施期間

令和 4 年 6 月～令和 5 年 11 月

5. 評価結果

総評：

数理、気象・データ同化、経済被害の 3 つの研究開発項目に分けて気象場の操作容易性の定量化や被害推定などを行うプロジェクトであり、計画に沿った順調な進捗があった。生命科学分野で用いられるデータ解析手法であるランドスケープ解析を台風の数値予報データに適用し、台風の操作容易性の定量化に向けた進展を得た。また、量子アニーリングマシンを用いてデータ同化の高速化の可能性を見いだしたことは、当初計画を超えた重要な進展である。コア研究への移行にともない本要素研究は終了するが、コア研究では気象制御の実現に向けて、研究開発のさらなる発展を期待する。

以上